

# 生活改善普及事業における農村生活史聞き取り調査について

An Oral History Survey of Local Society Conducted  
by the Agricultural Extension Services

知 野 愛\*

Ai Chino

In 1973 the Ministry of Agriculture and Forestry Daily Life Improvement Division was established. A long-term 10 year study was conducted by collecting data concerning life improvement. The active committee members, including folklorists and faculty anthropologist took part in this data collection. During the survey they conducted interviews and prepared handbooks of the findings. Additionally, local extension workers and technical experts from across the country did interviews in their respective areas. This is a summary of these findings.

1. Beginning around 1972 the (Promotion of Living by Ratio of Elderly People) project began. The purpose was to interview the elderly respondents with the intention of making local changes based on the wishes of those surveyed.

2. In this interview survey of life history collection, it was a known fact that living improvement extension workers and expert engineers had a well-informed understanding of the feelings of farmers' needs and thoughts. This understanding led to more useful evaluations which in turn were essential to solving current regional problems.

## はじめに

戦後農村における生活改善普及事業は、1948 (昭和23) 年の「農業改良助長法」<sup>1)</sup>により、国と府県の協同事業として始まった。「農業改良」「生活改善」「若者に対する青少年育成」の三分野に分けられるが、筆者は数年前から「生活改善」分野に着目し、生活改善普及事業の中心となった生活改良普及員(その指導的立場の専門技術員も含む)として働いた女性達に注目して調査を継続している<sup>2)</sup>。

本稿では、1973 (昭和48) 年度から1985 (昭和60) 年度まで、農林省農蚕園芸局普及部生活改善課が実施した「農山漁家生活改善技術資料収集」という調査事業に焦点をあて、生活改良普及員(および専門技術員)の活動の一部を跡付け、高齢者生きがい活動との関連についても考察する。

本稿の意義は、第一に、事業報告書「村の歴史と暮らし」I～XIの13年間に渡る資料の中か

---

\* 地域創成学科

ら、生活改良普及員・専門技術員の仕事に注目し、意義や位置づけを捉えるという点であり、第二に、調査事業を統括した生活改善課長や委員達が、生活改善普及のためには何が重要と考えていたのかを考察したという点にある。

## 1. 先行研究の検討

生活改善普及事業は、1948(昭和23)年から農林省農業改良局普及部生活改善課が主導した事業であるが、初代課長・山本松代の思想を詳述しているのが、片倉和人(2009)「戦後<生活改善>の思想の源流を探るー山本松代とプラグマティズムー」である<sup>3)</sup>。また、水上元子(2009)「山本松代と生活改善普及事業を語る」では、山本の下で課員として働いていた立場から生活改善普及事業発足時の様子を詳細に述べている<sup>4)</sup>。生活改善普及事業の変遷を全体的に包括的に捉えて詳述しているのが、市田(岩田)(1995)<sup>5)</sup>である。生活改良普及員の生活改善技術の拠りどころが家政学であり、生活改善普及事業発足当初は多くの家政学者からの協力を得ていること、生活改善課が農家の生活改善のために形成した理念と実現の状況を明らかにし、成立期の生活改善課が「地についていなかった」等の批判を受けたが、「かまどの改善」を始めとする生活改善技術は当時農家の実情に合わせたものであったこと、アメリカの生活改善がモデルとされ実践性と民主性を学ぼうとしたが、そのまま日本の農家に移転しようとしたわけではなかったことを明らかにしている。また、生活改善普及事業そのものを詳細に研究し「ファシリテーターとしての生活改良普及員の役割」ほか、普及方法や内容、変遷についても詳述している太田(2004)<sup>6)</sup>がある。

田中宣一編著(2011)<sup>7)</sup>は、戦後生活改善運動と共に昭和30年以降の新生活運動を取り上げ、生活改善活動が明治14年の篤農家を集めた農談会を始めとしていること、それを契機に各地に農談会が開催され生産性向上のために民間伝承の農業技術を聴取すると共に、生活改善についても議論され始めたことを述べている。菊池義輝(2010)は、農業指導・生活改善・青少年育成の3事業に対して農家家族がどのように対応したのかを関連付けて示し普及事業の全体像を描き<sup>8)</sup>、千葉悦子(1995)は、社会教育の視点から農村女性の側から見た生活改善事業を論じている<sup>9)</sup>。

また、農林水産省農林水産研修所生活技術研修館所属の立場から、農家農村生活の変化の概要と生活改善普及活動の展開と成果について述べている田部浩子(1998)<sup>10)</sup>、1948年からの生活改善普及事業の中で女性農業者の地位がどのように変化したかを詳述したのとして天野寛子(2001)<sup>11)</sup>、三重県における普及員観察資料の分析を通して農村の人間関係の変化と女性の地位に焦点を絞って論じたものとして、同じく天野寛子(2002)がある<sup>12)</sup>。また、「女性農業者の地位向上支援の現状」として「農林水産省組織改革のたびに縮小・改編、廃止される女性農業者の地位向上支援部署」であること等、生活改良普及員の位置づけ等を詳述した一連の研究が

天野寛子・粕谷美砂子(2008)に記されている<sup>13)</sup>。以上のように、多くの先行研究の蓄積があり本稿はそれらに依るところが大きい。

しかし、管見の限り、1973(昭和48)年度から1985(昭和60)年度の「農山漁家生活改善技術資料収集」調査に焦点を当てた研究は少ないと思われるため、本稿で焦点をあてる。

## 2. 研究の方法と資料について

前述の通り1973(昭和48)年度から、農林省農蚕園芸局普及部生活改善課によって「農山漁家生活改善技術資料収集」事業が始まり、その報告書として「村の歴史と暮らし・I―農山漁家生活改善技術資料収集 昭和48・49年度報告書」が発刊された。この後、「村の歴史と暮らしII」を1975(昭和50)年度、「村の歴史と暮らしIII」を1976(昭和51)年度と、各年度1冊ずつ刊行している。最後の1984(昭和59)・1985(昭和60)年度は2年度を1冊にまとめXI号まで続いた。現在では、2006(平成18)年復刻の『農山漁村生活史調査資料集』全6巻でも閲覧することができる。

本稿では、本学所蔵の「村の歴史と暮らしI～III」と、それ以降のIV～XIまでを復刻版(全6巻、福島大学図書館所蔵)を主な資料として文献調査を行った。

この報告書は、農林省農蚕園芸局普及部生活改善課編、発行は社団法人農山漁家生活改善研究会となっているが、当研究会は1957(昭和32)年に設立し初代会長は東畑精一、1968(昭和43)年3月に農林省を退職した山本松代(初代生活改善課長)が同年4月から理事を、1976(昭和51)年からは、同氏が三代目会長を務めている<sup>14)</sup>。

報告書の目的は、「日本の各地でどのような生活技術が伝承されているか、そしてそれを現代においてどう評価するか。また、これからの農山漁村の生活をゆたかにするためには、それらの伝承をどのように活用すればよいか。そしてさらに、全国各地で農村の生活改善の仕事をしている生活改良普及員の活動の中へ、どのようなかたちで具体的なプログラムとして盛りこみ、実際に役立てていけばよいか」を探求するものであった<sup>15)</sup>。

## 3. 生活改善技術資料収集調査事業

### (1) 事業の意図

農林省農蚕園芸局生活改善課の「農山漁家生活改善技術資料収集」事業は、矢口光子生活改善課長によって開始され、その後、塚本美恵子、高橋淳、吉田佐柄子など歴代課長に引き継がれていった。

昭和48・49年度の報告書I(以下、報告書の年号は和暦表記とする)の「はじめに」で農林省生活改善課長矢口光子は、「生活改善技術資料収集」(以下「聞き取り調査」と記す)を始めた動機を、次のように記した。

まず、構想を始めた昭和47年当時の状況を、「経済希求一辺倒の世相の中で、津波の如き怒涛に翻ろうされる有様を、霞が関の一隅で時々刻々に感じながら、どのような対策が必要で可能かを思い巡らした」と述べている。

そして、「生活改善普及事業の主役は農家の人々と生活改良普及員であり、その援助を都道府県が、さらにその援助を農林省が行っていることは今更云うまでもない」という前提を確認した上で、「結局、農家の人々と生活改良普及員が、農村の暮らしについてどのように自信をもち、自分の足で大地を踏みしめ、ふるさとというものに真実が息づいていることを感じとること、そのことが肝心だと考えた。その方法は、新しいものを知るの前に古いものを知ることによって、何かが拓けるに違いないと考えたのである。」(下線引用者)<sup>16)</sup>と述べ、聞き取り調査をする意義を力強く説いている。生活改善課長矢口光子の並々ならぬ決意をもってこの事業は開始されたことが、この文章から伝わってくる。

## (2)委員会委員

開始時の委員会は、宮本常一(武蔵野美術大学教授・民俗学)を中心として、宮本が推薦した3名の委員(日本という枠組みを越えて生活を考えることが大切であるという意味から各国の調査に携わっている人)が選ばれた。祖父江孝男(国立民族学博物館教授、発足時明治大学教授、文化人類学・生活学)、米山俊直(京都大学助教授、日本民俗学・文化人類学・生活学)、石毛直道(国立民族学博物館助教授、発足時甲南大学助教授、考古学・文化人類学)である。この「生活改善技術資料収集委員会」は、生活改善技術館で年数回開催し内容の協議を行い、現地調査は、年1回、数か町村を選定して実施することとした<sup>17)</sup>。

委員会会議の中で「女性の生活史を女性が聞き出すことの価値が確認された」ため、1978(昭和53)年度からは、原ひろ子(調査当時お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科助教授、文化人類学)も加わり<sup>18)</sup>。1985(昭和60)年度からは、田村善次郎(武蔵野美術大学教授、文化人類学・民俗学・生活学)、井上忠司(甲南大学教授、生活学・文化人類学)も加わった<sup>19)</sup>。

当時の様子をよく知る、生活改善課発足当時の課員水上元子さんは、初代課長山本松代と二代課長の矢口光子が学際的に調査を進めたことについて次のように証言している。

「矢口さんは(中略)、山本さんからずっと学際ということは言われているわけね。自分たちもそうやって訓練されて来たから。矢口さんはもう、地域社会の問題だと思っているから、建築の中でも農村計画の人もあれば、農業経済だとか、文化人類学だとか、ともかく、いろんな専門分野の人を集めた。生活改善課にいるときも、文化人類学の有名な先生、宮本常一先生なんかも、私も農村調査にご一緒させていただいたけれど、昭和四十何年頃に『村の歴史と暮らし』という本が何冊か出ている。(略)常一先生、祖父江先生。その当時、農村の文化を残していきたいということで生活改善課も予算を立てた」と語っている<sup>20)</sup>。

### (3) 聞き取り調査の進め方

1973(昭和48)年度は、上記の通り学識経験者による委員会を組織し、収集すべき生活改善技術資料の範囲および収集の方法等の検討から着手し、その実情把握のための実地調査を委員が3か所で実施した。1974(昭和49)年度には、聞き取り調査の進め方の合意形成を図り、「①収集する生活技術、②(人々が)誇りにしているものをとらえる一量より質を求める、③生活技術の根底にあるものは何か、④生活史からとらえる」<sup>21)</sup>として、「生活史聴取調査用チェックリスト」を作成した。

1975(昭和50)年度には、委員による実地調査の他に、現地をよく知る生活改良普及員による調査が提案され、そのための手引き「生活史収集の手引き・あなたもお年寄りから聞いてみては」を作成した。翌51年度に、委員による調査地として石川県輪島市1か所、生活改良普及員による調査地として山形県南陽市内原ほか13か所が選定され、生活改良普及員が初めて調査に参加するようになった。

### (4) 調査対象地域

この調査は、1974(昭和49)年に開始していた農家高齢者生活開発パイロット事業と関連しており、農家高齢者創作活動施設設置事業によって設置された創作活動施設(その数は、モデル的なもので第一年目は10か所)のある地域に調査地を重ねて、訪ねてみてはどうかということになった。

1975(昭和50)年度には、「調査対象の市町村は農家高齢者生活開発パイロット事業の実施市町村から」選定したのであり、「これはお年寄りと普及員さんとのつながりがとれはじめたという意味合いとお年寄りが比較的多いということ」を理由としているという記述がある<sup>22)</sup>。

例えば、同年の調査実施地は「秋田県仙北郡西木村※、富山県上新川郡大山町、愛媛県宇和島市日振島、岐阜県中津川市※苗木」であり、「※印は前掲のお年寄りの創作施設のある市町村」と明記されている<sup>23)</sup>。調査地は、13年間で日本全国47都道府県126か所の市町村という広範囲に渡った。

### (5) 聞き取り調査の内容

聞き取り調査で収集する「生活技術資料」は、「農山漁家の生活及び地域社会生活とともに、伝承されてきた暮らしの知恵としての生活技術で今後の生活改善に役立つものとし、その生活技術の内容は、衣、食、住、管理、教育、保健等」と決定した<sup>24)</sup>。

### (6) 調査者

事業開始時の1973(昭和48)～1974(昭和49)年の2年間は、民俗学や人類学の専門家による

委員会で事業の進め方や方針、生活史収集のあり方が話し合われ、委員が農村へ赴き調査を実施した。その後、1976(昭和51)年度からは委員の他に各地の生活改良普及員が、1980(昭和55)年からは専門技術員が聞き取り調査に参加した。

生活改良普及員が聞き取り調査に加わる理由は、「収集者自身が生活を改善していく技術をその中で見つけていくという方法が採用された。つまり、収集を通じて、じっくり地域の姿を把握することは、より深い目で対象や地域を見つめることになり、生活を改善する課題を解決するための実情を把握し、真の農民援助へとつながるものだろう」と考えられたからであった<sup>25)</sup>。

前述の通り、1980(昭和55)年度以降は、生活改良普及員を指導する立場の「専門技術員」が調査に加わる。その理由は、第1に「提出された収集結果報告書に散見される収集する側の理解不足を打開するには、専門技術員が収集の意図を十分理解し、調査方法を修得することが緊要と考えられた」こと、第2に「専門技術員の収集を通じて生活史収集の幅が一層広がり、より充実した内容となることへの期待があった」からである<sup>26)</sup>。

#### 4. 生活改良普及員の聞き取り事例

次に、生活改良普及員が行った生活史収集(聞き取り調査)の内容を具体的に知るため、三つの事例を「村の歴史と暮らしⅢ」(昭和51年度)から拾い出したいと思う。

##### (1) 山形県南陽市内原の調査(遠藤葉子生活改良普及員)

内原集落とその概況として、1)立地条件および集落のおいたち、2)気象、3)交通、4)地域農業の動向、5)むらの中の集団や施設、6)生活史資料収集にあたって、以上6点を述べた上で、集団のつきあいや年中行事、集団への参加などに焦点をあてて湯村五郎さん(大正4年生 62歳)から聞いた話を記している。

「とにかく人々が、`集まり、`語り合い、`教えあい、`受け継ぎあい、の機会が、各々の年代にあり、それがまた、くらしの中での楽しみであるのと同時に、付き合いの中での大切なものとして、自他ともに認識しあい、村のまとまりに通じていたことは確か」であり、「今の時代にふさわしい人々の付き合いの場、親しみの場として、かつての藁仕事や村祭りに代わるものがあるのではないだろうか。また、それを新しい時代にふさわしいものに創りだしてゆくことが、忙しくすぎてゆく昨今の暮らしだからこそ、大切になってきているのではないだろうか」と、経済希求一辺倒になりがちだと考えられた当時の状況を踏まえ、危機感をもって報告している(下線引用者)<sup>27)</sup>。

##### (2) 埼玉県大里郡妻沼町大字男沼の調査(小井川敏子生活改良普及員)

「今度、農家高齢者生活開発パイロット事業で生活総合調査の後、(聞き取り調査対象者の)

徳治氏とつながりができた。『親子三代でお世話になるわねえ』と訪問のたびに言われる。徳治氏に十数回お会いして、昔話や体験談を聞いた」（カッコ内は引用者）ということであり、農家高齢者生活開発パイロット事業があったからこそ、つながりが生まれ、聞き取り調査対象者を選定でき、自然な聞き取りができたことが分かる。<sup>28)</sup>

### (3) 長野県下高井郡木島平村内山の調査(池田玲子生活改良普及員)

調査対象者は81歳の女性だが、「17歳で結婚、長男(会社勤め)夫婦と同居、4人の孫のしつけをしてきた。今でも家の洗たく、フトン作りなどは、おばあちゃんの仕事。ムラに伝わる行事をしっかりと踏襲してきているので有名なおばあさん。31歳の時自転車に乗ったり、男と一緒に山仕事をしたりで、その気質は男まさりで機転がきく」という人だった。

「電気のついた頃のこと」、「紙すきのこと」、「年中行事のこと」など様々なことを語っているが、「嫁さんになった頃のこと」では、「(うちの田植えが終わってから)3キロほど離れた瑞穂まで田植えの出稼ぎにも行った。(中略)母親達は、子守の子供のごはんと一日分のおしめを持って、朝は3時に家を出て夜は11時頃帰りそれから洗濯をして、寝るのが12時になる。(中略)自分でもこんなに苦労して、子供にも哀しい思いをさせて、こんなことしなければ生きていけないのかと思って、そのまま立って泣いたものだ」と話したという<sup>29)</sup>。

このように、生活改良普及員は、担当地域の農家高齢者生活開発パイロット事業の生活総合調査で、何度も足を運び気心がわかっている人を対象者として選定し、生活史について聞き取った内容を整理し、関連するデータを調べて報告書を作成した。年1回の座談会では、調査を行った人達が各地から上京して集まり、委員の方々から調査についての指導やアドバイスを受けた。それは、活動を振り返り今後に生かすという有意義な経験となった。

## 5. 高齢者生きがい活動の推進との関連性 ～例として福島県の場合～

上記3の(4)で述べた通り、調査対象地域は「農家高齢者創作活動施設設置地域」を参考にして選定したようであるが、例外もあった。

福島県の場合では、「村の歴史とくらし」巻末記載の「農家高齢者生活開発パイロット事業実施村名」の表には、「安達郡岩代町、岩瀬郡岩瀬村、河沼郡河東村、相馬郡鹿島町」の4か所が記載されている。聞き取り調査地は3か所であり、1978(昭和53)年の安達郡岩代町、1979(昭和54)年の岩瀬郡岩瀬村、この2か所は表に記載されているが、1980(昭和55)年の川俣町は表に記載がなく、パイロット事業実施村以外からも調査地を選定したことがわかる。

この調査事業が開始された1973(昭和48)年の翌年、昭和49年に、福島県では「高齢者の生きがい活動の推進」を開始したことが、「福島県農業改良普及事業40周年記念誌、普及事業40年の歩み」に記されている。1974(昭和49)年当時、生活改良普及員は54名であり、農業改良

普及員数276名の5分の1の数であったが、少ない人数ながらも懸命に活動していた。

その内容は、「高齢者に生きがいを持たせるため、そのよりどころとする施設を設置し、ワラ細工や盆栽等の趣味を仲間と共にできるよう指導の範囲を高齢者まで広げる活動とした」とある<sup>30)</sup>。

「村の歴史とくらし」の調査報告中、福島県内では3か所が登場することは既に述べたが、調査者などは以下の通りである。

1回目は1978(昭和53)年、民俗学者の宮本常一委員が福島県安達郡岩代町、2回目は1979(昭和54)年、吉島照子生活改良普及員が福島県岩瀬郡岩瀬村、3回目は1980(昭和55)年、中田カネ生活改善専門技術員が福島県伊達郡川俣町で聞き取り調査をしている。(他県も調査地は平均2〜3か所であり、平均的な数といえる。)

昭和53年は委員が、昭和54年は生活改良普及員が、昭和55年には専門技術員が調査に参加して報告書を記載しており、昭和55年以降は専門技術員が調査に参加することになったということが、ここでも確認することができる。

生活改良普及員の吉島照子氏は、聞き取り調査を行った時の様子を、「私も4月からの新任地でありましたが、過去3か年勤務をし、高齢者創作施設設置にたずさわった関係で、高齢者とは顔なじみでありましたが不安でもありました」と述べている。つまり、昭和49年度開始の「農家高齢者創作活動施設設置事業」(高齢者が手仕事をしたり、おしゃべりができるような集会所の設置)により、顔なじみだった高齢者を聞き取り調査対象者としたことが分かる<sup>31)</sup>。

## 6. 生活改良普及員が生活史聞き取り調査に参加する意義(座談会・委員会の記録から)

### (1) 座談会の概要

1976(昭和51)年度は、委員の他に生活改良普及員が初めて調査に参加した年であり、実施地区は10県14か所であった。調査後の座談会「生活史をとってみて」では、委員4名(宮本常一、祖父江孝男、米山俊直、石毛直道)と生活改良普及員10名が出席し話し合っている。10名の内訳は、山形県置賜農業改良普及所から2名、栃木県鹿沼、埼玉県熊谷、千葉県安房、富山県富山、岐阜県恵那、和歌山県和歌山、岡山県高梁、岡山県津山の各農業改良普及所から1名ずつである。

そこでの発言項目を拾うと次のようになる。(1)何のために生活史を収集するのか、「生活改善にどう生かすか、深く根のはった仕事につながる、お年寄りの生きがいに通じる、お年寄りや若者の媒体に、農民1人1人にふさわしい自己開発からよりよい村づくりに、歴史を知ってムラを知る」ということ、(2)どんな人を選びどう接するか、「お年寄りの特徴、信頼を得る人間関係づくり、相性のあう人からやってみてもいいのでは」、(3)どういう準備が必要か、「予備知識(村の歴史、日本の歴史)が必要」など、(4)プライバシーの問題では、「本当の話



がでる聞き取りを、「プライベートなことの発表のしかた」など、(5)どんなまとめ方がよいか、「一人の人に沿ったまとめ方、枚数は制限しない、一生の山を中心に」などが語られた<sup>32)</sup>。

## (2) 調査した生活改良普及員の意見感想

座談会に出席した生活改良普及員は次のように発言している。

### ①生活改良普及員が聞き取る利点

- ・(調査地は)村史や資料など何もない所だが、普及員になってからここにずっといるので、土地の人に気安く受け入れてもらえ楽しく収集することができた。
- ・その地域や人々をよく知っているからこそ、構えずに受け入れてもらった。
- ・普及所の人は嘘をつかないということで、信用をベースにして聞きとることができて良かった。
- ・自分の担当している地域をよく知っているつもりで、長年してきたのに実は何も知らなかったということに気づいた。もっと早くからこのようなことをやっていれば、もっといい指導ができた。

### ②反省点

- ・集めることはおもしろかったが、生活改善へどう位置づけていけばいいのかははっきりしなかった。
- ・収集している中で、良かったなあというのをおぼろげながらつかんだけれども、それを本当にどう生かしていけばよいかというと、とまどう。

### ③良かったと思うこと

- ・上からの行政の押しつけではなく、相手の立場に立って考えるのが普及の本筋であろう。山形県では全県の生活改良普及員が行っている。
- ・基礎資料を大切に個人で指導ができれば、本当にいい仕事になると思った。
- ・核家族化が進む中でうまく話し合いができていないが、年寄りには語りた、若い人も聞きたい、その辺の媒体を生活改善でやる意味があるんじゃないかと最近思うようになった。
- ・高齢者生活開発パイロット事業をやったが、歴史的に深くほりさげてやらなかった。これをやってみて、その地域がどういうことで成り立っているのか、そういう歴史があったからこそムラの共同意識が今も培われているのだということがよくわかった。
- ・高齢者事業を昭和49年からやり、3年過ぎたのでまとめてみようかと考えていたが、生活史の収集を機会に、エピソードも含めた1人1人の持っているものを書いてもらってまとめたらどうだろうかというアイデアが生まれた。
- ・農繁期の忙しい時で遠慮しながら行ったが、喜んで待っていてくれる。
- ・私が行くというのがわかると、その人の友達も来て座り込んで話を聞いたり、話をしてく

れる。

### (3) 座談会での委員側からの意見

生活史収集の目的を米山委員が5点指摘している。

- ①普及員さん自身が対象についての理解を深くし、豊富にすることによって、仕事に反映させることができる。
- ②老人と若い人の媒体になれる。
- ③地域を理解するために、村の歴史的背景をとらえることが必要で、その役に立つ。
- ④将来の生活のためにも伝承したいものを残しておくことに意義があり、それをすることによって1人1人の自己開発の手段や、生きがいになる。
- ⑤現在のあり方を知る根拠がわかるし、記録を残していくこと自体の価値があげられる。  
(中略) 実際に農村にいる生活改良普及員さんが生活改善に直結した部分で行えば、普及活動の目的と重なり、非常に結構なことだと思う。

石毛委員が付言した。「自分では書かない人、誰も伝記を書かない人生を、地域に密着している生活改良普及員さんが聞くことによって(略)、追体験をすることができる(略)。そういうものがあってはじめて、ある地域の新しい仕事を与えられる。目に見えないところで、仕事の成果の違いがだいぶ出てくる」のではないか。

また、座談会後の委員会で、今後の方針について検討した中で次のような発言が出た。(発言した委員名は記載されていないが、宮本委員を中心とする委員会の意見と捉える。)

(1) 収集活動を地域に生かしていくという点では、「それぞれの地域の中での生き方の発見」、「ムラとはどんなものか」、「集落が連合しているのは祭りのつながりによる」、「失ったものをとりもどす事で村が活気づくのではないか」、「民具の調査から自分達の生活を見直し、新しい文化の中で全村に広げていったらいいものを見つけていくことが大事」ではないか。

(2) 今後の課題では、先の座談会で「生活史収集は普及の基本的態度に通じるものである」と多くの人が発言したことに触れ、「さらに他の地域で続けてやってみたい」、「他の生活改良普及員も収集してみてはどうかと呼びかけている人もいた」ということである。

意義としては、「生活改良普及員が今迄の活動と視点をかえて何かを見い出したところもあろうし、地域のお年寄りがおもしろいことを思い出したところもあろう。これらの中から1つ1つを見つめていけば、これからの豊かな村づくりにつながってくるものが出てくるのではないだろうか。それはまた、お年寄りにとっても自己開発に連なり、家族の中での新しい役割発見ということにつながる」と述べる。またそれを、「今後生活改良普及員が、収集し発見したことをそれぞれのムラの課題の解決にじっくりと結びつけていく」、「生活改良普及員による生

活史の収集を続けていきたい」、「生活史を収集することによって古い伝統が残り、それが新しい方向に転換していくのではないだろうか」と今後の方向性を記す。「村に内発するものを刺激し、それをどれだけ助けていくことができるか、今後も検討していくべき課題だろう」と結んでいる<sup>33)</sup>。内発的な変化を促すファシリテーターとしての役割を、生活改良普及員の方々が果たすことを期待していると言えるだろう。

#### (4) 委員として調査全体を通して学んだこと

1978(昭和53)年度から委員会に加わった原ひろ子委員は、復刻版の「解説」において、自身が調査に関わって学んだことについて次のように述べている<sup>34)</sup>。

「第一は、くらしの主役はひとであること、第二は、それぞれの地域で、人々が何を誇りにしているのかを知ることの重要性、第三は、生活史の聞き書きから、多様なレベルでの危機管理の知恵が浮かび上がってくるということであった」というのである。

これは、本聞き取り調査の意義を的確に示しており、以上の3点は、同じく調査に参加した生活改良普及員・専門技術員の方々が学んだことに通じるのではないか。村の課題解決にとりかかる前に、農家の人々の思いを知り、村の暮らしを知り、人々に寄り添うということを念頭におき、実践した活動の一つがこの聞き取り調査であったといえるのではないだろうか。

#### まとめ

本稿で明らかになったことは以下の3点である。

- 1, 「農山漁家生活改善技術資料収集」(生活史聞き取り調査)は農林省農蚕園芸局生活改善課によって1973(昭和48)年から始まり、民俗学や人類学等の委員による委員会を組織して指針を作成し、最初は委員が調査に赴いたが、1976(昭和51)年から生活改良普及員が、1980(昭和55)年からは生活改良普及員の指導的立場の専門技術員が調査に加わった。
- 2, 聞き取り調査は、1972(昭和47)年度「農家高齢者生活開発パイロット事業生活総合調査」や、1974(昭和49)年度からの「高齢者生きがい事業の促進」と関連して実施したもので、「高齢者から学ぶ」「高齢者の生きがいに通じる」ということを目的の一つとするものであった。
- 3, 農林省生活改善課長や委員達は、「農村の人々の暮らしを知り、人々の思いに寄り添うこと」が生活改良普及員・専門技術員の仕事の根底にあるものとして最も重要であると考えていた。調査を通して知り得た内容を各地域の課題に結びつけて考え、古い伝統を残し新しい方向へ転換することを目標としてこの聞き取り調査を実施したのである。

## 今後の課題

本稿の対象時期は、1973(昭和48)年以降の約13年間であるが、高齢化が顕著に進んだこの時期に計画された様々な事業の詳細について、調査することが今後の課題である。

また、高齢者の生きがい活動や農村の人々の暮らしの向上のために、生活改良普及員・専門技術員の方々がどのように取り組んだのかを調査継続し、現在の私たちが地域の発展のためにできることは何かを考える上での示唆を得たいと考えている。

- 1) 農業改良助長法の目的は、「能率的な農法の発達、農業生産の増大及び農村生活の改善のために、農民が農業に関する諸問題につき有益、且つ実用的な知識を得、これを普及交換して公共の福祉を増進すること」(第1条、昭和23年7月15日)であり、そのために国は交付金を出し、府県は目的達成のために普及指導活動を行う農業・生活改良普及員を置き、普及所(指導センター)を運営してきた。京都農村生活研究会『生活改良普及員って知ってはいりますか』同会、2009年、p.4
- 2) 知野愛「戦後農村の生活改善普及事業の展開と生活改良普及員の歩み—福島県に注目して(1)—」郡山女子大学紀要第46集、2010年、pp.83-94  
同「戦後農村の生活改善普及事業における普及指導員の歩み(2)—福島県内の重点活動項目と聞き取り調査内容の検討—」郡山女子大学紀要第47集、2011年、pp.47-58  
同「戦後農村の生活改善普及事業における普及指導員の歩み(3)—幻灯会スライドに見る生活改良普及員の姿—」郡山女子大学紀要第48集、2012年、pp.31-52  
同「戦後農村の生活改善普及事業と家電製品—スライド資料に関連して—」郡山女子大学紀要第49集、2013年、pp.29-44  
同「戦後農村の生活改善普及事業と結婚式簡素化の一側面—スライド資料に着目して—」郡山女子大学紀要第50集、2014年、pp.41-55  
同「戦後農村生活改善普及事業における山本松代の考え—家庭生活に対する考え方を中心に—」郡山女子大学紀要第51集、2015年、pp.15-28  
同「戦後農村の生活改善普及事業にみる子育て支援—季節保育所の開設について—」郡山女子大学紀要第53集、2017年、pp.147-161
- 3) 片倉和人「戦後<生活改善>の思想の源流を探る—山本松代とプラグマティズム—」『農と人とくらしNo.1 山本松代と生活改善普及事業を語る』農と人とくらし研究センター、2009年、pp.4-16
- 4) 水上元子「山本松代と生活改善普及事業を語る」『農と人とくらしNo.1 山本松代と生活改善普及事業を語る』農と人とくらし研究センター、2009年、pp.17-59
- 5) 市田(岩田)知子「生活改善普及事業の理念と展開」農業総合研究第49巻第2号、1995年
- 6) 太田美帆「生活改良普及員に学ぶファシリテーターのあり方—戦後日本の経験からの教訓—」、独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所、2004年
- 7) 田中宣一編著「戦後生活改善運動と新生活運動」農文協、2011年
- 8) 菊池義輝「1950-60年代における農業改良普及事業と農家家族—埼玉県を例に—(1)」横浜国際

社会科学研究第15巻第1・2号、2010年

- 9) 千葉悦子「生涯学習政策下の農村女性の自己教育活動」行政社会論集第7巻第2・3号、1995年
- 10) 田部浩子「農村生活の変化—生活改良普及員の果たした役割—」『日本人の生活』日本家政学会創立50周年記念出版、建帛社、1998年
- 11) 天野寛子『戦後日本の女性農業者の地位—男女平等の生活文化の創造へ』ドメス出版、2001年
- 12) 天野寛子「生活改善普及事業を通してみる高度経済成長期の農村社会における人間関係の変化と女性の地位—三重県における普及員観察資料(1964年)の分析—」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第28号、2002年、pp.43-46
- 13) 天野寛子・粕谷美砂子『男女共同参画時代の女性農業者と家族』ドメス出版、2008年
- 14) 片倉和人「資料—山本松代の年譜」「農と人とくらしNo.1 山本松代と生活改善普及事業を語る」農と人とくらし研究センター、2009年、pp.60-61
- 15) 「村の歴史とくらし・I 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和48・49年度報告書」表紙
- 16) 同上、p. 2
- 17) 「村の歴史とくらし・I 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和48・49年度報告書」p. 8
- 18) 「村の歴史とくらし・V 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和53年度報告書」p.13
- 19) 原ひろ子「解説」『農山漁村生活史調査資料集』2006(平成18)年復刻版pp. 7-11
- 20) 水上元子「山本松代と生活改善普及事業を語る」「農と人とくらしNo.1 山本松代と生活改善普及事業を語る」農と人とくらし研究センター、2009年、pp.46-47
- 21) 「村の歴史とくらし・I 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和48・49年度報告書」p. 9-22
- 22) 「村の歴史とくらし・II 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和50年度報告書」p.10
- 23) 「村の歴史とくらし・II 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和50年度報告書」p.11
- 24) 「村の歴史とくらし・I 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和48・49年度報告書」p.165
- 25) 「村の歴史とくらし・IV 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和52年度報告書」p.13
- 26) 「村の歴史とくらし・VII 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和55年度報告書」p.220
- 27) 「村の歴史とくらし・III 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和51年度報告書」p.58
- 28) 同 p.88
- 29) 同 p.116
- 30) 「普及活動の経過と現状」『福島県農業改良普及事業40周年記念誌 普及事業40年の歩み』1988年、福島県編集発行、p.59
- 31) 「村の歴史とくらし・VI 農山漁家生活改善技術資料収集 昭和54年度報告書」p.102
- 32) 同 pp.225-236
- 33) 同 pp.237-238
- 34) 原ひろ子「『農山漁村生活史調査資料集』解説」、同資料集第1巻、2006年復刻pp. 7-13

